名古屋大学
文学部・人文学研究科 同窓会

NEWSLETTER

あおぎり

第21号 CONTENTS

ごあいさつ	2
学内短信	3
名古屋大学文学部創立75周年 記念講演会・シンポジウム報告	4
秋季サロン報告： ハイブリッド人文学―スキルとツールの共進化―	5
分野・専門（研究室）の動向	7
連載：『追憶　加藤龍太郎先生遺歌集』から（1）	18
卒業生・修了生からの便り	19
名誉教授からの便り	19
教員の著書紹介	20
新任・退職の先生方	21
文学部・人文学研究科同窓会役員	22

名古屋大学文学部創立75周年記念講演会・シンポジウム、増設図書室内覧会

ごあいさつ

文学部・人文学研究科同窓会
代表幹事
加納 寛
（1993年 東洋史研究室卒業）

文学部・人文学研究科同窓会会員の皆様、あけましておめでとうございます！

2023年度より代表幹事に上番いたしました加納です。近隣の愛知大学にて常務理事・副学長をつとめております。

文学部・人文学研究科同窓会は、これまで前任の大西隆信先輩まで、多くの先輩方や先生方のリーダーシップのもと、同窓生同士の親睦を深めてまいりましたが、このたびの役員・運営委員の改組により、現役世代を中心とした組織に生まれ変わりました。これまでの同窓会活動では、我々現役世代は、参加率も高いとは言えず、貢献もそれほどできていなかったので、先輩方から我々の世代に同窓会の運営を託され、生まれたての小鹿がブルブル震えながら立とうとするような心細さに襲われています。それに加え、本同窓会は、かつての青桐会から現在の同窓会に継承発展した2003年から数えて20年を経た節目の時期でもあり、2019年の同窓会統合、2022年の年会費制度廃止（つまり、基本的に収入がない組織になっています）など、新たな状況に直面しており、これからの方向性を模索しているところでもあります。是非、会員の皆様から忌憚のない御意見や御協力を賜りつつ、同窓会活動をより魅力あるものにしていきたいと考えておりますので、同窓会に、お気軽にお声がけや御参加をいただければと存じます。

2023年7月に開催されました「同窓会サミット」（名大内の各部局同窓会の代表が一堂に会する会議）での大学側のお話によれば、名古屋大学では、名大基金の第2回募金キャンペーンを2027年度までの5年間にわたって展開するとのことですが、我々同窓生にも相応の協力が期待されているようです。私大勤務者としての経験からすれば、「そんなことより、まずは同窓生サービスを何とかしろよ（ちょっと怒）！」と思いますし、サミットでもそのように主張してまいりましたが（加納の言動が、文学部・人文学研究科同窓会の品格を損なっているという御批判もあろうかと存じます。御批判は真摯に承りますので遠慮なくご意見下さい！）、同窓会も大学もともに手を取り合って社会貢献をしていくことが重要だと考えております。今後とも、なお一層の御協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます

学内短信

研究科長
周藤 芳幸

同窓生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。昨年、文学部・人文学研究科は創設75周年を迎え、11月25日には野依記念学術交流館で記念講演会・シンポジウムと式典を開催いたしました。当日、会場にお越しいただいた方々、あるいはオンラインで参加された方々には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、この周年行事に向けて皆様からお寄せいただいてきた寄付金（名古屋大学特定基金）により、かねてから懸案であった文学部棟における図書スペースの整備・拡充を実現することができました。こちらについても、皆様に心から感謝の意を表したいと思います。

さて、この一年間を振り返ると、生成系AIの急速な普及に象徴される情報技術の革新によって、人文学の世界にも大きな変革のうねりが押し寄せつつあることを、さまざまな機会に、痛感させられてきました。もちろん、文学部・人文学研究科でも、この動向に対処すべく、人文知共創センターを2022年度に新たに設置したことは、すでにご報告している通りです。2023年度の同窓会秋季サロンでは、同センター長の中村靖子教授に加えて、岩﨑陽一准教授、鄭弯弯助教により「ハイブリッド人文学　―スキルとツールの共進化」と題する大変に魅力的な講演会が開催されましたので、皆様のなかにもその活動の一端に触れられた方が少なからずいらっしゃるものと存じます。また、全学レベルでは、現在、デジタル人文社会科学研究推進センターの新設に向けた準備が進められており、文学部・人文学研究科もこれに積極的に参画することを予定しています。

この間、文学部・人文学研究科には、古代哲学の岩田直也准教授、西洋美術史の杉山美耶子准教授、考古学の中川朋美准教授に加え、附属センターの特任准教授として郭佳寧、同助教として加藤真生、井上隼多、鄭弯弯と、いずれも新進気鋭の若手研究者が着任されました。一方で、2023年2月には、人類文化遺産テクスト学研究センターの次期センター長に内定されていた近本謙介教授がご出張先のパリで急逝されるという悲しい出来事もありました。近本教授のご冥福を心からお祈りするとともに、学部・研究科の今後のますますの発展に向けて、これからも努力を重ねて参りたいと存じる次第です。

名古屋大学文学部創立75周年記念講演会・シンポジウム報告

本年は、名古屋大学文学部創立75周年にあたります。同窓会のみなさまにも葉書にてご案内申しあげましたが、11月25日、野依記念学術交流館にて記念講演会・シンポジウムを開催いたしました。当日は、会場に90名ほど、オンラインでは130名近くの参加者がありました。ご参加くださったみなさまにお礼申しあげます。

講演会は、坪井秀人先生（早稲田大学文学学術院教授、名古屋大学名誉教授）にご登壇いただきました。「世界文学と日本語文学の過去現在未来」というテーマで、教養主義の質的変化のなか新しい型の教養をいかに生み出していくかという問題や、その具体例として国文学から日本文学、そして日本語文学へという展開についてお話しくださいました。坪井先生は、本学国文科のご出身で、実は私はその後輩にあたります。私は国文科で学位を取得しましたが、現在は日本文化学という分野専門に属しており、ご講演の内容はまさに名古屋大学文学部での変化にも重なるものと深く納得しつつうかがいました。

また、シンポジウムは、川本悠紀子先生（本研究科准教授）の司会で、「人文知を未来に紡ぐ　デジタル・ヒューマニティーズから見る世界」をテーマに開催されました。宮川創先生（国立国語研究所テニュアトラック助教）はエジプトの言語、河江肖剰先生（本学高等研究院准教授）はピラミッド研究がご専門で、それぞれの研究においてデジタル技術が生み出す可能性を示してくださいました。また吉田先生（本研究科准教授）は、エチオピアの少数民族の文化物のデジタル・アーカイヴ化のご経験から、誰のためのデジタル化かという根本的な問いかけをしてくださいました。デジタル化は、さまざまな局面で今後もすさまじいスピードで進むことは間違いなく、研究も教育も、いかにそれを組み込んでいくかが課題となろうかと思います。文学部・人文学研究科の未来を見つめる充実したシンポジウムとなりました。その後、記念式典、最後に祝賀会を催しました。祝賀会は、コロナ禍を経た私たちにとって、対面で開催できることの有り難みを感じる時間ともなりました。

また、75周年記念事業として、文学部図書室を拡充しましたので、25日午前中にはその内覧会を行いました。合わせて『名古屋大学創立75周年記念文集』も刊行しました。文学部は入学者43名で始まり、75年を経た本年度の在籍生は、学部・研究科合わせて1000名を超えています。次の周年記念時にも、多くの方とともにそれを祝うことができるよう、願っております。（飯田祐子）

増設図書室内覧会

祝賀会

シンポジウム

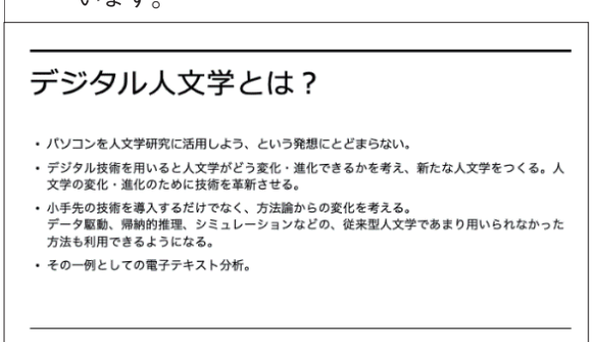
入り口案内

ハイブリッド人文学—スキルとツールの共進化—

デジタル人文学とは？

岩﨑陽一
（インド哲学，准教授）

今回の秋季サロンでは、司会として、人文知共創センターの紹介と、デジタル人文学とは何かというお話、それから、テキスト解析がテーマの講演でしたので、電子テキストとは何かというお話をいたしました。デジタル人文学（Digital Humanities）は、世界的に勢いが付いている分野ですが、いまでもパソコンの便利な使い方についての学問だと思われることが多いようです。しかし、デジタル人文学は、人文学のためのパソコン教室でも、また単なるパソコンを使った人文学研究でもありません。デジタル技術と融合することで、データ駆動や帰納的推論、シミュレーションといった、従来の人文学には馴染みの薄い方法を利用できるようにした、人文学の先端領域です。中村先生と鄭先生には、その最先端の研究をご紹介いただきました。私自身は、サンスクリット文献学の領域での革新を試みています。従来方式では原理的に不可能と思われたサンスクリットの形態素解析が、大規模言語モデルを使うと思ったより正確な答えを出すことが分かり、これからも多くの発見があるだろうという期待をもって研究しています。

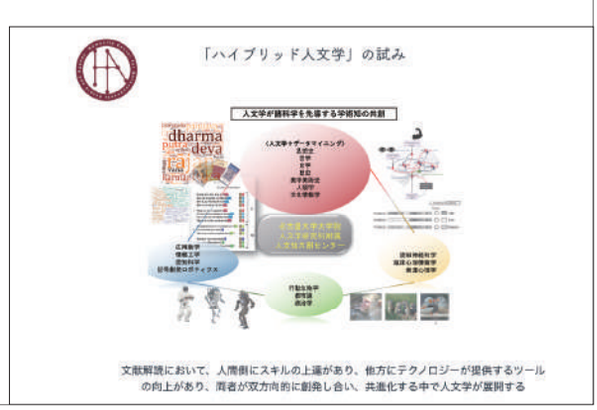


言葉は道具と共に

中村靖子
（ドイツ語ドイツ文学，教授，人文知共創センター長）

デジタル人文学という言葉をよく耳にするようになった。人文学と言えばアナログの代表、というイメージからすれば、形容矛盾の感を与えないでもない。そのイメージを踏まえたうえで、あえて、アナログではない人文学をアピールしようという狙いなのかもしれない。私が学部生だった頃、ある先生が、鉛筆とボールペン、万年筆、ワープロのインクのうち、データ保存に向いているのはどれかを試すために、それぞれで紙に書いて、日の当たるところにおいておいた、という話をしていたが、そんなところにも人間の好奇心は発揮されるらしい。その後フロッピーディスクが登場し、USBメモリが登場し、今では誰もデータを持ち歩かない。データ〔文献〕は必要なときにアクセスするものなのだ。

人文学者だって、道具の進化と共にスキルの積み方は変わってきている。それによって「伝統的な何か」が失われることもあるかもしれないが、悲観的になる必要はない。ある時代にとても大切に思われていたものが、忘れられ、のちに発掘され、新しい光を浴びることが人間の精神史のなかではしばしば起こることを、人文学者ならよく知っている。こうした変化を思うと、現代の私たちが、古代のアンティゴネーの運命に感動することがむしろ不思議なほどである。変わるものがあり、変わらないものがある。言語を用いるようになり、これを書き表し、書き残すために道具を用いたときから、人間はハイブリッドで人文知を共創してきたのだ。



ハイブリッド人文学―スキルとツールの共進化―

デジタル人文学応用例

鄭弯弯（文化情報学，助教）

この度は，『デジタル人文学応用例』という題目で報告いたしました．私は小さい頃から文系の科目が苦手で，大学入試の際に文系と理系の間でほとんど迷わずに理系を選びました．データサイエンスのアプローチで文学研究を始めたのは修士課程の時でした．最初の研究テーマはある作家の文体変化でした．当時，データサイエンス方法を使って検証と再発見の試みを行いました．しかし，データサイエンス手法は，傾向を容易に把握できる長所である一方，人文学が追求する文学性の解釈は未だにできていません．今回の報告では，主に人文学におけるデータサイエンスアプローチの短所および経済学への応用例として景気センチメント分析を取り上げました．前者は，近年作者の判別精度が低いという原因で，議論が冷え込んでいる単語の長さに対して，使用方法よりも単語の長さも著者識別の有効な特徴量になり得ることを提起し，判別精度だけでなく，解釈可能性が高い文体特徴量を提案しました．後者は，近年注目されている景気センチメント指標の補正や景気の解釈を試みました．これらの内容により，デジタル人文学の多くの可能性を示したいと思います．

2023年度
ホームカミングデーの動向について

川本悠紀子
（西洋古典学，准教授，2023年度ホームカミングデー実行委員）

第19回ホームカミングデイでは、四つの企画を文学部・人文学研究科では開催しました。①学科長・研究科長による文学部・人文学研究科紹介（オンライン）、②保護者等説明会、③教員の著作展示、④秋季サロンです。

昨今は、新型コロナウィルス蔓延を受けてオンラインの企画が多かったのですが、今年度は大学全体で現地開催の企画が大多数を占め、一方で遠方にお住まいの方々も参加できるハイブリッド企画が多く実施されました。文学部・人文学研究科も、研究科長による紹介と秋季サロンはオンラインないしハイブリッド開催となりました。特に秋季サロンの参加者は多く、現地参加15名、オンライン参加94名と、デジタル技術を融合させて行う人文学研究への興味関心の高さがうかがえました。また、現地開催の教員著作展示にも多くの方に足をお運びいただきました。

来年、ホームカミングデイは第20回目を迎えます。この記念の年にスペシャルな企画を全学的にご用意することになっておりますので、是非またご参加ください。

【言語文化学繋】

言語学分野・専門

長かったコロナ禍もようやく落ち着きを見せ、海外にも自由に行けるようになりました。折からの円安の影響もあり、行ったはいいが滞在費が高くついて大変、ということはあるにせよ、個別言語を研究している教員や学生にとって、必要があれば現地に行ける、というのは良いことです。もっとも、11月現在、アメリカ本土やヨーロッパ方面のセントレア発着便は未だにありませんし、また、ヨーロッパ方面はロシア上空を回避するためやたら時間がかかるのも早く何とかしてほしいものです。

また、2023年は年の初めころからChatGPTが話題となり、AIの進化と絡んで、人間の言語能力や言語の本質に関心が集まった年でもありました。

さて、既に卒業生の皆様もご存知のこととは思いますが、長年学生の指導に当たってこられた堀江先生が、2023年の3月を以て名古屋大学を退職されました。現在、先生は、変わらずお元気で、関西外国語大学で教鞭をとっておられます。堀江先生はたくさん学生を取っていらっしゃいましたので、懐かしく思われる方も多いかと存じます。なお、他の教員に変わりはなく、堀江先生の後任も当面補充の予定はありません。（佐久間淳一・言語学）

日本語学分野・専門

2023年度の日本語学研究室には、学部生33名、博士前期課程4名、博士後期課程6名、研究生2名が所属しています。

今年度入学した院生の3人は、ハイクオリティな講義に圧倒されつつも、講義内で繰り広げられる議論を楽しんでいます。齋藤文俊先生のジョークと宮地朝子先生のボリューミーなお話にも、半年かけて慣れてきました。先生方の、日本語と学生への愛に助けられながら、学びの多い日々を送っています。

先日、英語学の友人から、日本語学の院生室はいつも賑やかで楽しそうだね！という言葉をもらいました。日本語学の和やかな雰囲気は、先輩方が在籍されていた頃から続いているのだろうと思います。

話は変わりますが、2024年4月には、名古屋言語研究会の例会が200回を迎えます。こうして研究会を長く続けられているのも、皆様のご尽力のおかげです。本当にありがとうございます。200回目という節目の大会ですので、多くの方のご参加を楽しみにお待ちしております。

例会の情報を含む、日本語学研究室の情報は、名古屋大学日本語学研究室HPにて公開しています。日本語学研究室について掲載して欲しい情報などございましたら、是非ご連絡ください。

同窓生の皆様とお話できる日を、リテラボでお待ちしています。

日本語教育学分野・専門

日本語教育学分野は，2023年4月現在，博士後期の学生18名，博士前期25名，研究生4名，特別研究生1名，交換留学生6名，客員研究員3名，博士候補研究員2名，博士研究員5名と，4名の教員がいます。月に1回，分野研究会を行い，研究生も含めて研究発表をし，議論を交わしています。

7月16日（日）には，修了生の釜田友里江さんが勤めている神田外国語大学で学部生たちと研究発表会をしました。8月28日（月），29日（火）には名古屋大学で「第6回会話分析研究発表会」（会話分析研究会主催）が行われ，関東・関西・中部などの大学から70名近くの参加者がありました。

修了後に研究機関に就職したみなさんは，秋田大学、福井大学、中部大学，中部学院大学，国士舘大学，国際医療福祉大学、河南大学、南京財経大学、遼寧対外経貿学院、広州大学，広州理工学院，蘇州科技大学，大連海洋大学といった大学で教鞭をとっています。さらに，今年も中日本自動車短期大学で7名の学生が教育実習を行いました。

日本語教育学分野は，教員が1人減ってしまいましたが，優秀な学生のみなさんに支えられて，今でも活気あふれる分野になっています。今後も多くの修了生たちが日本語教育の様々な場面で活躍し，社会に貢献してくれることと期待しています。

（志波彩子）

応用日本語学分野・専門

2022年度の応用日本語学分野の修了生は博士前期課程10名、博士後期課程１名でした。毎年、博士論文を提出し博士号を取得する学生が出てきており、喜ばしく思っています。

2023年度の在学生数は博士前期課程15名、博士後期課程15名で合計30名が在学しており、大変賑やかな分野になりました。在学生の研究テーマは多岐にわたっていますが、いずれも日本語教育現場への応用を目指した実践的かつ実証的な研究を進めています。応用日本語学では、言語学、教育学、日本語学の研究分野をベースにしつつ、日本語教育への応用を目指す研究を行っていますので、ダイナミックで実践的な研究活動を行っています。

また、指導教員が所属している言語教育センターの日本語教育現場にTAとして携わっており、様々な国籍や背景を持った日本語学習者のサポートを経験しています。大学院を修了した後は日本語教育現場に携わることになりますが、在学中に日本語クラスの運営やTAとして現場に携わる経験を積むことは修了後のキャリアに大いに役立つものと思います。研究活動と教育活動を有機的に結びつけて両立させることは容易なことではありませんが、大学院で学んだことは今後の教育活動の糧になることと思います。これからも実践的、実証的な日本語教育学の研究を目指す学生たちをお待ちしています。

（文責：応用日本語学分野教授　許　明子）

2022年度博士前期課程・博士後期課程の修了生

【英語文化学繋】

英語学分野・専門

現在、英語学分野・専門は大名力教授、田中智之教授、秋田喜美准教授の３名体制で研究・教育に取り組んでいます。今年度は、英語学分野・専門の主催で２回の公開講座が行われ、日頃の研究成果を社会に還元するいい機会となりました。

英語学分野・専門には今年度も慶事がありました。平田拓也君（博士後期課程）が中部大学嘱託講師として赴任しました。ここのところ毎年、大学院生が研究職に就いており、本人の努力とOB・OGの方々のご尽力の賜物ですが、現役大学院生が研究を続ける上で大きな励みになっています。

現在、英語学分野・専門は学部生30名、大学院生12名、研究生２名の合計44名で構成されています。今年度は８名の２年生と２名の大学院生を迎えました。来年度は４名の１年生が分属を希望しており、大学院生が大幅に増える見込みです。今年度は、英語学のほぼすべての授業が対面となりました。コンパなどの行事を徐々に復活させたいと思っています。

今年度も、日本英語学会や日本英文学会などで大学院生が学会発表や論文掲載で目覚しい成果を上げています。また、学部生も授業や卒業論文の準備に熱心に取り組んでいます。（写真はその様子です。）この良き伝統を守るべく、これからも切磋琢磨して頑張りますので、ご支援、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

英米文学分野・専門

国内外で、また大学内で、時代の変化をひしひしと感じる日々ですが、皆さま、いかがお過ごしでしょうか。さて、英米文学分野・専門では、去る３月に学部生２名が卒業し、４月に分属により新２年生５名を迎えました。大学院では４月に博士前期、後期課程にそれぞれ１名が入学し、10月には１名が後期課程に進学しました。今回は３月に学部を卒業された平井あす美さんにメッセージを寄せていただきました。

「大学卒業から半年が経ちました。私は金融機関に就職しましたが、学生時代、とりわけ就職活動を始めて以降は時々、「英米文学の知識を仕事に使わ

ないならば、大学に進学する意味はあったのだろうか」と考えることがありました。しかし現在働くなかで、大学での学びは無駄ではないと感じます。どう説明すればお客様に分かりやすく伝わるだろうか、どう調べれば欲しい情報を得られるだろうか、と今ごく自然と考え行動できるのは、学生時代に習慣的に鍛えられた論理的思考力、情報収集力、コミュニケーション力等のおかげであり、主体的に学ぶ大学だからこそ身についたものです。今後は大学4年間で得た力を更に磨き、社会人として精進していきます。」

◎写真は3月の卒業式後に開いた茶話会でのスナップです。（撮影のためにマスクをとっています。）[長]

英語教育学分野・専門

本年度は、博士前期課程に3名、後期課程に1名の入学がありました。昨年度より、分野全体の院生と教員が一堂に参加する「合同ゼミ」を毎週火曜日4限に行っています。毎回2名が担当し、それぞれの修論・博論について、または関連論文の文献レビューを発表します。分野全員に加え英語高度専門職業人コースで英語教育学をテーマにする学生、また修了生やゲスト研究者が集まる賑やかなゼミです。談論風発、さまざまな視点から研究課題・データ収集や解析の手法・考察について議論しています。対面の演習ですが遠隔地からオンラインで参加する院生もいます。分野全体の人的交流の場ともなっています。

11月には連続公開講座「データサイエンス時代の言語教育」第4回を対面＋オンライン中継で実施しました。「言語教育研究でのデータ収集と分析」をテーマに、博士後期課程の橋崎諒太郎君による「シャドーイング研究入門：あなたにもできるデータ収集と分析の方法」と、広島市立大学准教授の森田光宏先生の「英語学習振り返りデータの分析と解釈：利点と限界点」の2講演を行いました。

講演や修了生の声など、分野のブログもご覧ください：https://cms.hum.nagoya-u.ac.jp/ele/

写真は合同ゼミ（上）と公開講座風景（下）

【文献思想学繋】

ドイツ語ドイツ文学分野・専門

2022年11月1日、人文学研究科附属の第3のセンターとして人文知共創センターが発足しました。このセンターの使命は、ある学際的な研究プロジェクトの推進です。プロジェクトの研究期間は6年間、総勢24名で、メンバーの所属機関は13におよび、同じ専門分野の人はいない、という学際ぶりです。名大人文ではインド哲学の岩﨑先生、他部局からは認知神経科学、応用数学、複雑系科学、政治学の先生方にメンバーに入っていただき、センターには2023年度からは文化情報学を専門とする鄭弯弯先生が着任されました。事務方としては、私が名大に赴任する以前から、独文研究室を支えて下さってきた伊奈恭子さんが強力なサポーターとしてセンターの運営を手伝って下さっていて、この大所帯をなんとか切り盛りできています。それにしても。こうした学際的なプロジェクトを推し進める代表が、ドイツ文学研究者だとは……。

私が名大に赴任して間もなく文学部本館の耐震改修の話が持ち上がり、その際、学生数が少ない研究室は、リテラボの面積を半分にしようという提案がなされ、具体的に5つの研究室の名前が挙げられました。その一つがドイツ文学でした。あのとき、それに反対するために、「弱小」研究室の先生方と協議をし、抗議文を起草したことが懐かしい思い出です。

（ドイツ語ドイツ文学　中村靖子）

2023年8月、研究室の公式行事としては実に5年ぶりの顔合わせ会を開催しました

ドイツ語圏文化学分野・専門

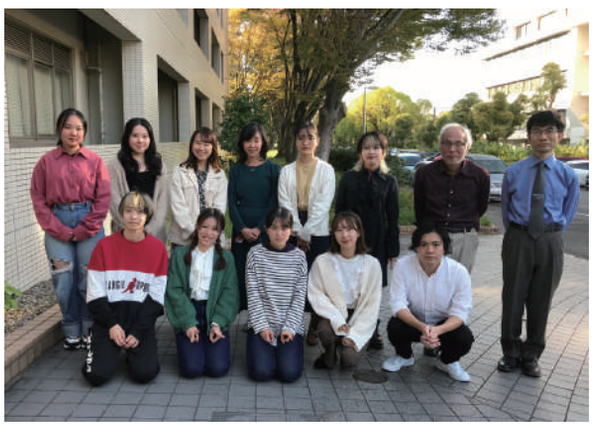
ドイツ語圏文化学は、2022年度新設の新しい分野です。本分野では、ドイツ、オーストリア、スイス、および東欧・ロシアのかつてのドイツ語地域など、広くドイツ語圏における、言語、文学、芸術を始めとする、様々な文化現象を研究することができます。人文学の伝統的な研究領域である語学や文学のほか、音楽、演劇、ダンス、ミュージカル、人形劇、デザイン、芸術運動、広告や雑誌など、幅広い文化現象が研究対象です。

ドイツ語圏文化は時代や地域に多様性があり、欧州および世界の歴史や文化のなかで成り立っています。ドイツ語圏文化学では、そのような様々な繋がりを意識し、イベントも積極的に行っています。Deutscher Mittag では、隔週の昼休みに、学生や教職員が集まってドイツ語で自由にお喋りをしています。ご紹介している図版は、2023年7月に、藤井たぎる先生、西川智之先生をお招きして開催した講演会『世紀転換期の都市―ウィーンの音楽と芸術』のポスターです。このほか、11月には高橋麻帆先生による講演会『古書業界における世紀転換期ウィーン』を開催、2024年3月には、本分野教員が参加して名古屋・栄の愛知芸術文化センターで、ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム『踊る文字―アヴァンギャルドが見た文字と身体』を開催します。詳しくは、研究室フェイスブック https://www.facebook.com/deutscheKulturNagoyaUni/ をご覧ください。

フランス語フランス文学分野・専門

学生さんの活躍が著しい1年でした。3月にGPJS International Workshop（於東北大学）にて小泉理子さん(M1)がフランス語で発表。4月からは小泉さん，渡邉菜月さん（M1）がTMI卓越大学院プログラムに選抜され，市川日南子さん（D1，4月より融合フロンティア次世代リサーチャー）と共に活動しています。『人文学フォーラム』にM1の2人を含む4本の論文の掲載が決まり，院生は学外の学術誌にも次々と論文を発表しています。DELFはB1（4年），B2（4年），C2（D3）に合格しました。曽根美咲さん（4年）がリヨン第3大学での交換留学より7月に帰国，小沢史門さん（D3）が11月よりトゥールーズ大学に留学しました。「日本の学生が選ぶゴンクール賞」には引き続き多数の学生さんが参加，3月末の最終選考会では中村日向子さん（4年）が地区を代表し，12月2日の学会中部支部会でのワークショップでは，市川さん，中村さん，齊藤愛純さん（博士前期課程修了）が発表します。リテラボが正式に合併し，学生さんたちの尽力で4階のリテラボと院生室もすっかりきれいになりました。

小栗栖がフランス語の著書を出版，奥田と加藤も国内外の専門誌や国際学会で成果発表を行いました。4月に川野恵子YLC助教が着任しました。



日本文学分野・専門

今年度の日本文学研究室は、大きな変化がありました。1998年以来、長きにわたって研究室の運営に尽力してこられた塩村耕教授が2023年3月をもって定年退職されました。塩村教授の研究室への多大な貢献に感謝するとともに、ますますの御活躍をお祈りいたします。塩村教授が退職された結果、今年度は、大井田一人で研究室を運営するという事態になりました。不慣れなことも多く、特に学生諸君には迷惑をおかけしていますが、多くの方々に支えられて何とかやりくりしています。名大の日本文学関係のポストは削減される一方です。人文学研究をめぐる昨今の厳しい状況の影響もありますが、教員の認識の欠如と努力不足によるところも大きく、申し訳なく思います。このような現状ですので、皆様のいっそうの温かいご支援をお願いいたします。また、些細なことでも近況をお知らせください。研究室にもお気軽にお越し下さい。卒業生の皆様がお元気でご活躍されていることをうかがうのは、何よりの楽しみです。こちらも次回は明るいお知らせができれば、と思います。研究室の在籍者は、大学院博士後期課程が2名、博士前期課程が10名、学部生20名、研究生1名です。

中国語中国文学分野・専門

研究室世話人は2022年度より引き続き笠井直美が務めております。今年度10月1日現在の本分野には学部学生1名、大学院博士前期1年4名、2年6名、博士後期1年6名、2年1名、3年5名、博士候補研究員2名、博士研究員1名、研究生5名が在籍しています（孟醒さん・顧彬楠さんが博士学位を取得されました。ここ数年の困難な環境の中の成果を嬉しく思っております）。夏にハイブリッド形式で開催されたオープンキャンパスでは、多くの高校生が訪れてくれました。将来、名大文学部に入学した暁には、本分野に分属されてほしいと願っています。また、学部3年野々部楓花さん・博士後期1年胡勝さんの分属ガイダンス合同説明会での見事なプレゼンテーションのおかげもあってか、来年春にまた新たな進学者を迎えられる見込みです。各研究室での蔵書点検も二年目に入り、今年度は博士後期1年の張禧睿さん・2年の王瑞さんを中心に、リテラボ（314室）の点検を済ませました(写真は点検後のリテラボで夜遅くまで勉強する皆さんの様子です)。今年度は文学部創立75周年記念事業の一環として文学部図書室が拡充され、『全宋文』など一部の図書をそちらに移動する予定となっています。研究しやすい環境が整えられ、学習・研究の一助となればと願っています。

哲学分野・専門

昨年度の『あおぎり』には、「来年は“新戦力”の加入を寿ぐ文字列が踊るだろう」といった内容が書き綴られたが、それから一年後の現在、その予告どおりに事が運び、恙なく岩田直也先生をお迎えすることができた。これまで二人の教員によって、まったく余裕のない情況のなか学生指導を含む研究室の運営がなされてきたのも、いまとなっては過去のこと。きわめて優秀な教員／研究者が研究室の同僚となり、ひとまずは雲が切れて日差しが戻ってきたことをわたしたちは素直によろこびたい。同時に、この人事に尽力してくださった研究科長ならびに執行部の先生方には、あらためて感謝の意を表するものである。

9月には、その岩田先生を加えて、やはりこれまでコロナ禍のため中止されていた夏合宿も再開された。くだんの合宿で目立ったのは、大学院生よりも学部生の参加が多かったことだ。高校時代の3年間、おそらくは集団で寝食を共にする経験など皆無であった学生たちは、異同は当然あろうが、ともに似通った問題関心、屈託、戸惑い、そして望みを互いに語り合うことが多少なりともできたのではないだろうか。彼ら、彼女らには、この体験を少しでも今後の学問的な、あるいは生きるための糧にしてもらえたらと切に願うばかりである。

合宿の際

西洋古典学分野・専門

昨年度は3名の卒業生を送り出しました。卒業式の日には茶話会をしたあと、今年は6本のラケットを用意し桜花のもとで暗くなるまでバドミントンに興じました。今年度は新たに加わる2年生がいませんでしたが、3年次編入生が一人加わり、大学院の修士課程にも2名が加わりました。そして11月現在、5名の4年生が卒業論文を、1名のMC2年生が、そして2名のDC3年生が博士論文の最後の仕上げにかかっています。こんどの春は大収穫となりそうです。

授業は、原典の講読・討論が、アイスキュロス『アガメムノン』(吉武)とウィトルウィウス『建築書』(川本)で、一般講義は「ギリシア・ローマ神話学」(西村賀子先生)、特殊講義は「古代ローマの植生と庭園」(川本)です。全員参加の討論演習(吉武・川本)は、今年は「オリンポス山」「オルフェウス」「manhood」「集会・裁判」「血」「商売」「レスボス」「雲」「狂気」などのテーマを取りあげています。

ところで、こんどの4月からはあらたに6名の2年生が加わることが決まっています。わが研究室の学部分属ではこれまでの最高記録で、たいへん楽しみです。(吉武・記)

インド哲学分野・専門

リテラボでおやつを楽しみ、院生室で厳しい輪読に打ち込む、コロナ前の印哲研究室の生活が戻ってきました。コロナ前と違うのは、院生室のホワイトボードが巨大な電子黒板になったこと。コロナで強制的にもたらされたDXをポジティブに捉えて、より便利に、そしてより正確にサンスクリットを読んでいきます。

前期の大イベントは東海印度学仏教学会の学術大会でした。開催校としてのたくさんの仕事を、現役学生が中心になって立派に成し遂げました。懇親会は南部生協2階。久しぶりにご来校いただいた卒業生の方も少なくありませんでした。

夏休みには、4年ぶりに研究室旅行を開催しました。八事興正寺で両界曼荼羅を特別に拝観させていただいてから、犬山に移動して読書会。卒論生のテキスト（タントラ）と博論生のテキスト（修辞学）を読みました。翌日は犬山の成田山名古屋別院を拝観。密教色の濃い研究室旅行となり、夜も遅くまで秘密集会が続きました。

今年は2年生が2名入ってきたほか、博士前期課程に2名が入りました。うち1名は内部進学。それぞれ中観とカーヴィヤに取り組んでいます。後期には上海から、仏教死生学を研究したい留学生が加わりました。教員の私は、人文知共創センターと併任になり、アクターネットワーク理論で中論を読むなどしております。

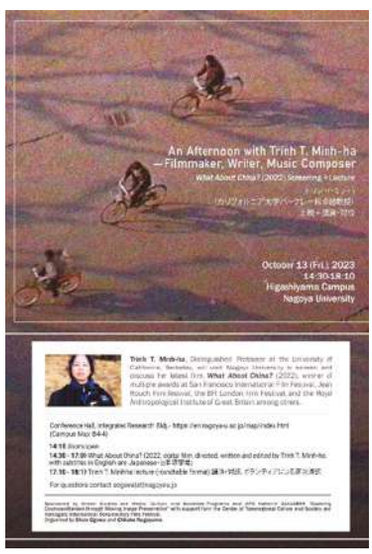
成田山名古屋別院にて

【超域人文学繋】

映像学分野・専門

2017年4月の人文学研究科の発足とともに設置された映像学分野・専門は、映画や映像に関する歴史的・理論的な研究を、一つの独立した大学院レベルのプログラムとして行う全国で数少ない研究室のうちの1つです。運営は、藤木秀朗、馬然、小川翔太の3人で行っています。院生は、G30「アジアの中の日本文化」プログラムに在籍して映像学を専門にしている学生も合わせて、2023年10月時点で博士後期課程15名、博士前期課程14名が在籍しています。そのうち4名はウォリック大学（英国）映画テレビ学科と共同で運営するPhDコチュテル・プログラム（グローバル・スクリーン・スタディーズ）に所属しています。アジア、ヨーロッパ、環太平洋の多様な地域から集まった学生が、英語や日本語を共通語として研究に取り組んでいます。

教員や院生企画による国際的なイベントも映像学プログラムの特色の一つです。今年度も、映画『おだやかな革命』を通して環境、映像メディア、科学技術、コミュニティを領域横断的に考える集まり（5月15日）、国際的に著名な映像作家・思想家のトリンTミンハ氏を迎えた上映・対談会（10月13日、図像）、また博士後期課程の院生企画による映画祭プログラマーや研究者を招聘した講演会（11月10日）など多彩な企画が実現し、この分野で先端を担う国内外の研究者と直に触れる刺激的な機会となりました。



日本文化学分野・専門

大学院専担である日本文化学講座には、おおぜいの大学院生が所属しています。例年、博士前期課程、後期課程あわせて10名程度の新入生がいますが、本年は12名の学生が新しく仲間に加わりました。

大学院生たちの研究の内容を少し紹介しましょう。ここ一年ほどを振り返ると、修士論文としては、戦後の翻訳文化論、遠藤周作論、江戸川乱歩論、今敏のアニメーション論、三島由紀夫論、森茉莉論、松浦理恵子論、村上龍論、村上春樹論が提出されました。博士論文としては、「日本近代文学における傷痍軍人表象」「日本近現代文学における炭鉱表象の研究――生活者たちの表現をめぐって――」の提出がありました。

2023年3月には、コロナ前までは毎年行っていた他大学との交流研究会も復活しました。金沢大学および近代文学会北陸支部との合同集会で、一日充実した研究報告会があった他、金沢市内の文学散歩も楽しみました（写真）。

本講座の特徴として、通常の授業に加えて、超域文化社会センターが主催するシンポジウムやセミナーに協力・参加している点があります。コロナ禍が一段落し、今年度はイベントも増えました。セミナーが3つ開催され、恒例となっている国際シンポジウムも1月に行われます。今年度のテーマは「都市問題再考：歴史・環境・メディア」です。

涌井隆先生が昨年末で退職されましたので、現在講

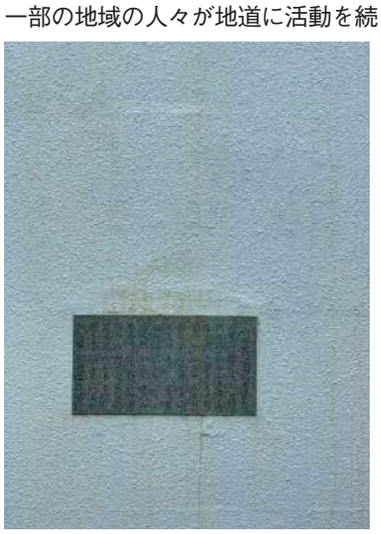
座に所属する教員は、飯田祐子（日本近現代文化・文学）、日比嘉高（日本近現代文学・文化）、英語による教育プロジェクト・G30「「アジアの中の日本文化」プログラム」を担当している岩田クリスティーナ（日本近現代文化・文学）、トリスタン・グルノー（日本近現代史）の４名です。

写真は浅野川沿い、「秋聲のみち」にて

文化動態学分野・専門

今年の8月、ゼミで長野県阿智村の民間施設「満蒙開拓平和記念館」を訪ねた。元移住者の証言映像や手記、現地での住居を再現したモデルなどを所蔵しており、過去のワンシーンを一瞬でも覗かせたような空間だ。戦時の苦しい生活を耐え難く、当時の「ムード」にのって故郷を離れた人々が、「満州国」で何を経験していたかを、移住した側だけでなく、現地の人々の視線も取り上げようと試みたことがわかる。断片的な記憶からかき集めた「満州」に複数のバージョンがなり得るので、面白く感じる一方、現在起きている戦争を考えるためにも貴重な場所だと思った。

同日に瑞浪市にある「日中不再戦の誓い」の祈念碑も訪ねた。戦時の軍需労働で強制連行された中国人殉難者のための慰霊碑で、市民で集金して建てた。毎年の9月に慰霊祭も行われるという。大きく報道されることなく、一部の地域の人々が地道に活動を続けているようだ。自分も先生に紹介されて初めて知って、興味深かった。



写真（筆者撮影）：瑞浪市の「日中不再戦の誓い」の碑。殉難した39名の労働者の名前が刻まれている。

すでに戦後と呼ばれるようになった時代であっても、戦争の記憶は過ぎ去ったものではない。今回の旅を終えて、今後は他の地域に散在する戦争の記憶の場も訪ねてみたいと強く思うようになった。

（劉亜銘　博士後期課程２年）

ジェンダー学分野・専門

長らく続いた感染症の拡大とその対策はようやく一段落したものの、今度は記録的な猛暑と戦火に世界が直面しています。過去に深く根差した大きな課題に対し、個人としての無力を痛感させられますが、将来を担う学生たちにとって何かしら役に立てばと願い、環境や国際関係、軍事・戦争を論じたジェンダー研究を、そのごく一部ながら授業で紹介しています。同様に授業では、ジェンダーと関わる時事について受講者と簡単な意見交換をする時間を設けたいと思いつつ、今年の国内に限ってもLGBT理解増進法や戸籍上の性別変更要件に対する最高裁判断、「年収の壁」の見直しなど間断なく続くそれを私自身が十分に追いきれない有り様です。個人的には某芸能事務所における性加害の問題と、それをめぐる報道、社会（人々）の反応に（一般的なメディア報道を踏まえたのみですが）驚き、思う所がいろいろありました。毎年発表されるジェンダーギャップ指数の日本のスコア、順位のように相変わらずなものもありますが、上記した時事他は変化の表れと言えましょう。学生共々、引き続きジェンダー平等を目指して研究を進めて参ります。

（新井美佐子）

2023年ノーベル経済学賞受賞者クラウディア・ゴールディンの著書の邦訳『なぜ男女の賃金に格差があるのか――女性の生き方の経済学』2023年、慶應義塾大学出版会。

【歴史文化学繋】

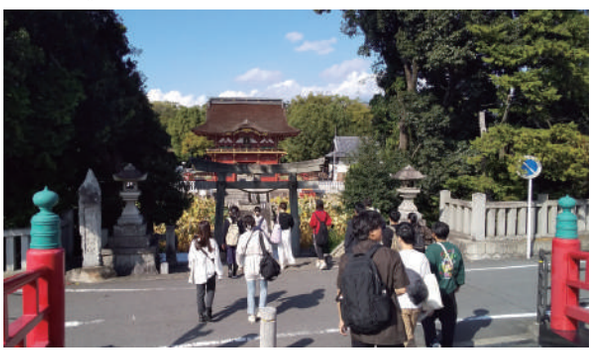
日本史学分野・専門

今年度の日本史学研究室在籍学生数は、学部２年生が例年以上に多く20人、３年生12人、４年生16人、博士前期課程13人、同後期課程６人、そのほかあわせて約70人です。

日本史関係の講義や演習は、ほぼ対面にもどり、フィールドワーク等も、通常に近い形で行えるようになりました。他の研究室（分野・専門）では、泊まりがけの調査等も復活しつつあるようですが、日本史学の研究室旅行は、今年度も日帰りで、岡崎を歩き回りました（写真）。教員免許や学芸員資格にかかわる実習などでは、各種学校、博物館、資料館等の卒業生のみなさまにお世話になっています。企業等で働く卒業生のみなさまとの交流も、ひきつづき意識してゆきたく

思います。

今年度末、2024年3月をもって、研究室の諸活動を長く牽引くださいました池内敏先生が定年退職なさいます。他の研究室でも、コロナ感染拡大ののち、特段の最終講義や懇親会等は催されない場合が多くなり、池内先生の場合にも、先生ご自身のご希望により、研究室に事務局をおく近世史研究会を主体として、研究を主眼とした集会が予定されていると伺っています。研究室としては、退職された先生方ともひきつづき連携させていただきながら、研究・教育の地道な継続発展に力を尽くしてゆきたく思っております。



東洋史学分野・専門

今年度の東洋史学研究室は，2年生3名，3年生2名，4年生2名，大学院前期課程7名（うち2名留学中），大学院研究生1名，後期課程9名（うち1名休学中），教員3名の総勢27名です。

今年度はようやくコロナ以前の状態を回復することができました。

5月には対面で新歓を行いました。9月には4年ぶりの合宿を実施できました。合宿は伊勢志摩の海がきれいな宿に一泊し，研究報告と懇親会で盛り上がりました。

また，東洋史学にとって重要な国際交流・海外調査を回復できたのがなによりでした。

秋学期には2年連続で中国「国家公派」の留学生を雲南大学から迎えました。また博士前期課程の学生二人がそれぞれ南京大学と台湾大学への留学に旅立ちました。

教員は，林が9月に雲南大学で講演しました。10月には大学院生（謝曦翎さん）とともに貴州と雲南で開催された学会に参加し，それぞれが研究発表を行いました。

また，土屋が8月に国際研究集会「成熟する台湾の教育」を開催しました。1月には台湾で調査を行う予定です。

同窓生の皆さまにはどうか今後とも温かく東洋史学研究室をお見守りください。

伊勢志摩の合宿での一コマ（9月18日）

西洋史学分野・専門

西洋史学研究室では、2023年3月に13名の4年生と2名の大学院生が卒業・修了しました。4月にはあらたに2年生8名と前期課程6名、後期課程への入学者1名を迎えて、新年度が始まりました。毎年4月に開催している4年生の卒業論文構想発表会および10月末の中間発表会は、今回もハイブリッド形式で実施しました。写真は中間発表会の前に、文学部棟入り口で卒業アルバム用の写真撮影をした際の様子です。

YLC特任助教の伊藤早苗さん（古代アッシリア史）は、引き続き西洋史学研究室の大学院生や学生の相談に乗ってくださっています。西洋史学研究室のスタッフは、古代史の周藤芳幸教授、アメリカ史の和田光弘教授と内田綾子教授、中世史の加納修教授、ドイツ史の北村陽子准教授の計6名を擁し、充実した研究指導ができる体制を維持できています。

5月には、第73回日本西洋史学会大会を、西洋史学研究室が主催しました。豊田講堂での記念講演と総会、全学教育棟での自由論題報告と小シンポジウムという2日間にわたるプログラムは、4年ぶりにすべて対面で行なわれ、合わせて600名ほどが参加しました。1日目の記念講演と総会はオンラインで同時配信しています。この大会運営にあたっては、西洋史学研究室の大学院生、学部生の皆さんにも活躍していただきました。

卒論中間発表前の一コマ－4年生と教員の集合写真

美学美術史学分野・専門

本年度美学美術史学研究室には、学部で七名の分属ありました。また、大学院博士前期課程へは四名が進

学しました。学部生、院生たちは、近世から現代に至るまでの多様な芸術家・作品ー媒体は絵画・彫刻・写本・ガラス工芸作品など多岐に及びますーを取りあげて研究に取り組んでいます。コロナ禍も終息し、大学院生は海外調査にも出かけるようになりました。院生によっては、早くも学会発表を経験する者もおりました。

学部生向けの美術史実習では、愛知県内だけでなく遠方へのエクスカーションに向かう計画も立てており、図版からでは感じとれない作品の息吹や存在感を体感する機会を設けています。また、企画展示を担当された学芸員の方から、展覧会の構成や裏話などを伺うことで、学生も展覧会を入口から出口までを一つのストーリーとして楽しむことが出来ているようです。本研究室出身の学芸員の皆様にはお世話になることも多いですが、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

末筆になりましたが、本年度より木俣元一先生の後任として、杉山美耶子先生が着任されました。15世紀フランドル絵画のご専門です。この研究室の柱である中世キリスト教美術研究の伝統が着実に継承されたことを嬉しく思います。

名古屋市美術館『福田美蘭展』での実習風景

考古学分野・専門

2023年度の卒業生は学部生７名、博士前期課程２名で、そのうち学部生２名が岐阜県庁と小牧市教育委員会に埋蔵文化財専門職として就職いたしました。

さらにおなじく2023年度を最後として、32年間にわたり名古屋大学考古学研究室で教鞭をとられた山本直人教授が定年退職され（山本先生はご退職後も盛んなご研究意欲で、10月に５冊目のご著書『縄文時代の生態考古学』（同成社）を刊行されました）、教員１人の講座としての年度スタートとなりました。幸いにも６名の２年生を迎えることができ、30名近くの研究室の学生に、金沢大学や愛知県立大学の学生さんも加え、８月には岐阜県関ケ原町の不破関跡の発掘調査を合宿形式で実施いたしました。

10月には中川朋美准教授を、新しい考古学研究室のスタッフとして迎えることができました。専門は古人骨からみた先史時代の暴力です。また、11月には人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センターに、本研究室の修了生である井上隼多氏が助教として採用されました。このあらたな陣容で、今後の考古学研究室を運営してまいります。

2024年２月には、考古学研究室と研究室ＯＢ会の企画を統合し、名古屋大学考古学研究室談話会を開催いたします。同窓生のみなさまには、今後とも研究室へのご厚誼を何卒よろしくお願い申し上げます。

不破関跡の発掘調査

文化人類学分野・専門

今年も３月に卒業生14名を送り出しました。2022年度の卒業生は、コロナ禍の影響をとくに受けた学年ですが、それぞれの新天地でのご活躍を祈念いたします。４月には新たに博士前期課程４名、後期課程２名、学部分属生12名を受け入れ、研究室は相変わらず賑やかです。コロナ期間中も対面授業や懇親会などは工夫しながら実施していましたが、今年はゼミ新歓や暑気払いも従来どおり学外の飲食店で実施、またコロナの影響で一時停滞していた交換留学や海外調査研究活動なども活発化しつつあります。

コロナの収束とともに各地で祭礼の通常開催が報じられていますが、佐々木教授も奥三河地域の花祭の参与観察実習を４年ぶりに実施するとともに、地域連携・地域協働を継続しています。東准教授は、３年半ぶりにフィリピン・ボラカイ島に渡航し、海外でのフィールドワークを再開しました。並行して、コロナ期間中に開始した愛知県知多郡南知多町と長野県木曽郡王滝村の調査を学生とともに継続しています。吉田准教授は、エチオピアとオーストリアでのフィールドワークを継続し、新たにエチオピア国内の行政資料のデジタル・アーカイヴズ化についても準備を進めています。

近本謙介教授が２月に旅先のパリで急逝されました。近本教授は2017年に着任され、人類文化遺産テクスト学研究センターやCore to Core関連でもご活躍

中であっただけに残念でなりません。近本教授のご冥福を心からお祈りいたします。

【環境行動学繋】

社会学分野・専門

卒業生の皆さんはご存知のように、社会学研究室には研究棟の3階に学生の共同研究室（315教室）があります。新型コロナが流行る前には、この部屋には学生のたまり場といった雰囲気があり、昼休みや放課後には誰かしらいて話し声が聞こえたものでした。ところが最近はたまにコピーをとりに3階に下りても電気がついてないことが多い。ふと気になり、閑散とした部屋に置かれた「社研ノート」を開いてみると、書き込みも2020年度を境にほぼ途絶えていました。2年間ほど対面的な接触機会が失われたことで、これまでの慣習が途切れ、授業以外の場面で学生が交わる機会が大きく減ってしまったようです。恥ずかしながら、そのことに最近になって気づかされました。我が身を振り返っても、大学の想い出として想起されるのは友人や先輩とのたわいもない雑談の類が多く、社会学の知識も先輩からの耳学問で得ていたところが多かったように思います。そのような場が失われるとしたら由々しき事態です。現在では「もはやコロナは過去のこと」といった雰囲気が支配的ですが、振り返ってみるといろいろ余波があることに気づかされます。先輩の皆さんが築き上げてきたサブカルチャーを復活させるべく、教員一同協力して研究室のリハビリに取組んでいきたいと思います。

（文責：室井研二）

心理学分野・専門

赤ちゃんラボの始動

2020年10月に心理学講座に着任してから早3年が経ちました。研究へのモチベーションは高まる一方で、時間や体力の限界という壁が立ちはだかり、エキサイトメントとフラストレーションを感じる日々を過ごしています。

そのような折、乳児を対象とする心理学実験室「赤ちゃんラボ」を始動させました。心理学には、こころの発達過程の解明を目指す発達心理学という分野があります。成人を対象とする認知心理学研究では、ボタン押しや評定等によって刺激に対する反応をとるというのが基本の手法です。一方で、乳児を対象とする研究では、当然ながらそのような手法をとることはできません。そこで利用するのが「見る」行動です。「目は口ほどに物を言う」とは言いますが、実際に赤ちゃんの視線は私たちに様々なことを教えてくれます。

人間のこころは、種として備わっている構造や機能と、環境から受ける刺激の相互作用によって、時間をかけて豊かに育っていきます。情報化や技術開発が目まぐるしい発展を見せるなか、非生物が人間のような知能や行為性を有する日は訪れるのでしょうか。赤ちゃん研究は、生物である人間の本質に対する洞察を与えてくれます。大学近隣の赤ちゃんや保護者の方々にご協力を賜りながら、この名古屋の地で、こころの発達的起源の解明に努めていきたいと思います。

（心理学　磯村朋子）

地理学分野・専門

地理学教室があるのは、文学部棟から北東に離れた環境総合館の6階です。学術雑誌から専門書まで何でもそろっており、地理学でできぬことはないほどのオアシスです。朝から晩まで電気がついており、院生の先輩方や先生方が研究されています。25名の学部生も参考文献を探したり卒論の報告会に出席したりするなど、たびたびここで活動を行っ

ています。

今年9月、学部2・3年生が行う調査実習「地理学実習」が4泊5日の日程で行われました。今年の実習先は熊本市で、地元の集落の生活や地場産業、商業、防災など、幅広いテーマの調査が行われ、調査法を学んだり地理学的にものを見る目を養いました。私はアンケート調査や聞き取り調査を行うことで、名古屋と熊本の大学生の旅行事情について調査しました。報告書の中間発表・締め切りまで時間が迫っておりますが、よいものができるように日々頑張っていきたいと思います。(文責:石原叶大/文学部地理学講座3年)

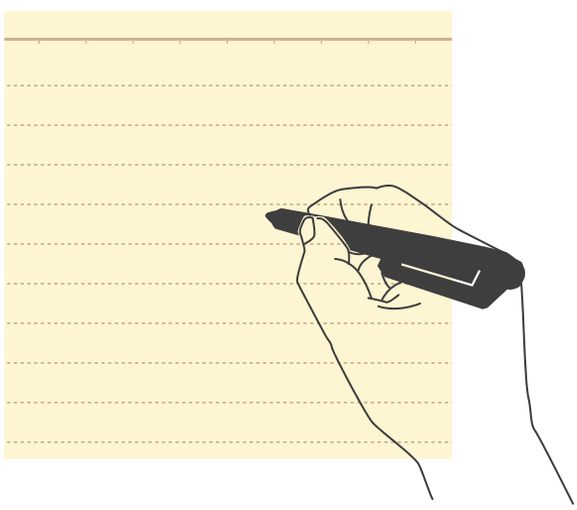
【英語高度専門職業人学位プログラム】

英語高度専門職業人コース

今春は、オンライン授業やハイブリッド形式の論文構想発表会など、コロナ禍による変則的な学びを経験した学生2名が無事に修了し、巣立ってゆきました。また、新入生3名を新たにコース生として迎えました。特記すべきは、修了生の発案で、修士論文を設置するスペースが研修室に生まれたことです。在校生にとっては修了生の修士論文を閲覧することがこれまでよりもはるかに容易になりました。このスペースを是非利用して、論文執筆に役立ててほしいと思います。

今春修了した内川怜香さんから近況が届きました。「現在、約半年間の新卒研修を経て、楽天モバイルが運営するモバイルショップのコンプライアンス関連業務に携わっています。楽天といえば、英語の社内公用語化が有名かもしれません。この公用語化は世界レベルでのビジネスを成功させるために導入されたそうです。新卒研修では英語の講義があり、また、毎週月曜日に行われる全社会議（朝会）では、各サービスの進捗情報の共有や社員と社長のQAセッションなどが全て英語で行われています。現在は、役員を前に行う英語のプレゼンテーションに備え、日々、プレゼンテーション力向上に向けて努力しています。」

修了生の近況報告は嬉しいものです。今後の活躍を大いに期待しています。



連　載

『追憶　加藤龍太郎先生遺歌集』から（1）

人文学研究科長　周藤芳幸

2023年に名古屋大学文学部は創立75周年を迎えたが、この間、私よりも前に学部長として部局の運営にあたってこられた方の数は、事務取扱の方も含めて37名に及んでいる。このうち、私が直接存じ上げているのは森正夫先生より後の13名の方に過ぎないが、初期の歴代学部長のなかでもとりわけ大きな功績を残されたのが、1986年に亡くなられた英文学の加藤龍太郎先生であることに異論はないであろう。というのも、先生が大学に遺贈された資産の一部が「加藤龍太郎英文学研究助成金」として文学部で運用され、英文学や英語学の研究振興や若手研究者の顕彰に大いに役立てられてきたからである。

ところで、生前の加藤先生は歌人としても知られていたが、昨年秋、山田幹郎名誉教授が研究科長室を訪ねてこられた際、加藤先生が晩年に先立たれた奥様を想って詠まれたという和歌の自筆コピーを示され、これをぜひ『あおぎり』に掲載していただきたいと所望された。その後、これは加藤先生の同志社時代の教え子（坂村時・渡辺英子）により『追憶　加藤龍太郎先生遺歌集』（私家版）として1987年に刊行された歌集の一部であることが判明したが、この歌集そのものが現在では入手困難となっていることから（本学の図書館にも所蔵されていない）、数回に分けて紹介することで先生のご遺業を顕彰したい。なお、私家版にない句読点は自筆表記に従って補い、草書体の漢字は新字体に改めた。

看病の日々

宵ごとに月細りゆく空さむし、心そぞろに雨戸繰りつつ。
柚の実も色づき初めぬ怠らぬ病守りつつ日数経にけり。
森の中に薄陽さすらし淡々とわが影法師動き行くかも。
歩みつつわれの足音聞きており遂に寂しき道と思はむ。
身の内のふかき疲れはすべもなし林の雨を聞きつつ眠らん。
小夜更けてひさしに落つる藤の実の音聞く頃となりにけるかも
庭芝に降りては消ゆる淡雪の止む気配なく夕づきにけり。
冬木立の梢にかかる夕月を忘れしものの如く見ており
ひっそりと花わらび一つ咲きており冬至をすぎて弱き日影に。
匂いすみれのはつはつ咲き初めてけ長き冬も終わらんとする。
心定まらぬこの日頃かも花みずきの散りたまる葉を掃くこともせず。
日並べて思いの晴れぬもどかしさ庭のこぶしも花散りにけり。

臨終（三月廿五日）

沈丁花の花咲きたりと云うわれの言葉もむなし聞き分けもせず。
明けもせず暮れ果てもせぬ薄明の意識の中に息づきており。
夕月の細くかかれる西空にいのちは消えて還ることなし。
元日にくみかわしたる盃を最後の酒と誰か知るべき。
うつし身のいのちはかなし散る花の消えてあとなき如く空しき。
（私家版にはさらに四歌が収録されているが、自筆コピーにはないため割愛する）

独り居の日々

朝床に小鳥を聞きて楽しみし人はいま亡し鳥は来鳴けど。
つぎつぎに花移り咲くあわれさよ心のうれい消ゆる日もなく。
裏畑のニラの葉青く茂りおり粥を食べさす人もあらなく。
ひざ掛けのシミ一つにも長かりし闘病の日々よみがえり来も。
夕風の身に沁む門に立ちており、かえり来ぬ人を待つとしもなく。
窓あけて吹き入る風の冷たさよ星影もなく暗きこの夜は。
細りゆく月西空にかたむきぬ夜更けて帰る独り居の家に。
梅の実にふる雨脚を見つつおり、事多き春も過ぎ行かんとす。
あじさいの花の紫濃くなりぬ、人をおくりて日数経にけり。
ゆすら梅の朱実を喰めば亡き人の面影遠くなりにけるかも。
街路樹のえんじゅの小花散り敷けるこの街に今宵は何を食はむ。

卒業生・修了生からの便り

榎本（旧姓 内藤）あゆち

1969年4月 大学入学（東洋史学研究室）

邯鄲一炊の夢

70歳を超え、時折「邯鄲一炊の夢」という話を思い起こします。昔々、中国邯鄲の盧生という貧しい男、道士から不思議な枕を借りてひと眠りしたところ、紆余曲折を経て立身出世・栄華を極めたが、実際には宿の主人が炊いていた黄粱が煮え切らない、ごく短い間の夢だった、という、お話です。栄華を極めたわけではないものの、色々なことをやってきた、でもあっという間だったという私の感慨は、ちょっとだけこのお話に通じます。夫の留学と転職に伴い米国や関東各地で生活し、ありとあらゆる経験をしました。その一方細々とではあったけれど研究生活を続けてきました。研究仲間と中国各地を巡り、邯鄲王城の遺跡を目にし、陰山・秦嶺山脈も越え、非常勤講師として勤めていた大学では様々な表情の学生さん達と会いました。研究を続けられた原動力は？と自問自答するとき、研究室でのある風景が思い起こされます。私の学部・院生時代東洋史研究室では、ひと月に一回ほど全ての教員・学部生院生が集まり、研究・時事問題、何でもいいから自由に話し合う集まりが持たれました。年次の高下、教員か学生かの壁を越え、遠慮なく話し合うというその在り方は、決して他の研究室・大学では一般的ではないことを、その後痛いほど思い知ることになるけれど、その時は何とも楽しく、色々お喋りしていました。学会や研究会席上でなんか言ってやろうという、私のスタイルの根っこには生来の図々しさに加え、この経験があったと今更ながら感じます。それを思い出しながらここまで書いてきましたが、紙幅も尽きました。夢の覚める心地です。でもまだ人生の日暮れには時間があるようです。さてもうひと頑張り。

東海大講師室にて、
卒業生の平野さやかさんと共に

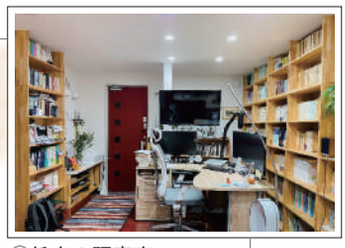
名誉教授からの便り

名古屋大学名誉教授（日本語教育学研究室）

玉岡　賀津雄

2021年3月，名古屋大学を退職して名誉教授になりました。郷里の内子町（大江健三郎が生まれた町）に近い松山市に研究室を作りました（写真①）。週に2回卓球をして，週に1回ギターを習い，庭の小さな畑で野菜を育てるという生活をしながら，論文を書く生活をしました。2022年から2023年にかけて，これまで夢だった*PLOS ONE*，*Quarterly Journal of Experimental Psychology*，*Journal of Psycholinguistic Research*，*Frontiers in Psychology*および*Phonetica*の5つの国際誌に筆頭で論文を掲載しました。2023年7月には『決定木分析を使った言語研究』を出版しました。この本の出版を契機に「言語実証プロジェクト」（https://sites.google.com/view/srpls）を立ち上げました。このプロジェクトは，ネット・AI時代に対応して，学術的な情報を無料でZOOMで提供することを目的としています。決定木分析を使った言語研究法を，2023年7月から11月まで毎月1回，合計5回発信しました。

2009年4月に名古屋大学に教授として赴任してから12年間で17名の院生の博士論文を指導しました。修了生は，国内では，北海道大学，東北大学，一橋大学，京都大学などに就職しています。中国でも，天津外国語大学，西安外国語大学，蘇州科技大学，上海財経大学，杭州師範大学などに就職しています。コロナが明けた2023年6月から7月上旬の3週間で，中国各地の9大学で講演をしました。6月8日に武漢の華中科技大学で講演した際には，私の2名の指導生を含めて名古屋大学の4名の修了生と家族の方々が集まってくださいました（写真②）。また，6月19日には西安外国語大学で講演をして，指導生と共に西安の街をレンタル自転車で走りました（写真③）。今では，私の修了生ばかりでなく，その教え子からも研究についていろいろな相談が寄せられるようになりました。ゆっくりと考える「ゆとり」の時間があるというのは，研究にとって大切なことだと実感するこの頃です。



①松山の研究室

②武漢での修了生の集まり

③西安の街を散策

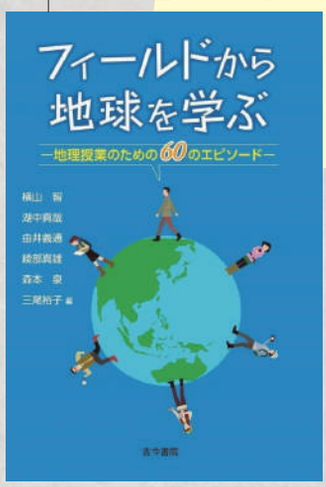
教員の著書紹介

◆中村 靖子先生

中村靖子(編)
『予測と創発——理知と感情の人文学』
春風社、2022年11月

◆横山 智先生

横山智・湖中真哉・由井義通・綾部真雄・森本泉・三尾裕子(編)
『フィールドから地球を学ぶ——地理授業のための60のエピソード』
古今書院、2023年3月



◆新井 美佐子先生

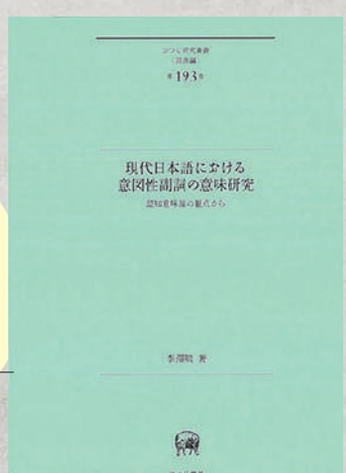
新井美佐子(共編著)
『ジェンダー研究が拓く知の地平』
明石書店、2022年12月

◆名誉教授 玉岡 賀津雄先生

玉岡賀津雄(著)
『決定木分析による言語研究』
くろしお出版、2023年7月10日

◆李 澤熊先生

李澤熊(著)
『現代日本語における意図性副詞の意味研究——認知意味論の観点から』
ひつじ書房、2023年1月



受賞情報

横山智教授他編『フィールドから地球を学ぶ: 地理授業のための60のエピソード』(2023年, 古今書院)が「日本地理教育学会・第3回出版文化賞」を受賞（編者・著者の共同受賞）

イベント

2024年4月13日(土)に名古屋大学文学部で名古屋大学哲学会2024年度大会を開催します。

新任・退職の先生方

今年度 新任の先生

岩田 直也准教授
哲学

鄭 弯弯助教
人文知共創センター

加藤 真生助教
超域文化社会センター

郭 佳寧特任准教授
人類文化遺産テクスト学研究センター

中川 朋美准教授
考古学

井上 隼多助教
人類文化遺産テクスト学研究センター

今年度 退職の先生

長畑 明利 教授
英米文学

池内 敏 教授
日本史学

滝川 睦 教授
英米文学

北村 陽子 准教授
西洋史学

久島 桃代 助教
地理学

文学部・人文学研究科同窓会役員（2023 年 4 月 1 日～ 2024 年 3 月 31）※＝新任

役職名	名前	出身・在籍研究室	卒業・終了年、現職など
顧問	和田　壽弘	インド哲学	1979年学部卒・1982年博士前期課程修了・元文学研究科長・人文学研究科名誉教授・全学同窓会代表幹事
	木俣　元一	美学美術史学	1980年学部卒・1982年博士前期課程修了・元文学研究科長・人文学研究科教授・副総長
	佐久間　淳一	言語学	元人文学研究科長・人文学研究科教授・副総長
	齋藤　文俊	日本語学	前人文学研究科長
代表幹事	周藤　芳幸	西洋史学	人文学研究科長
	加納　寛	東洋史学	1993年学部卒・1995年博士前期課程修了
幹事（運営委員）	北村　陽子	西洋史学	1995年学部卒・1997年博士前期課程修了・人文学研究科准教授
	土屋　洋	東洋史学	1995年学部卒・1997年博士前期課程修了・人文学研究科准教授
	三田　昌彦※	東洋史学	1989年博士前期課程修了・人文学研究科助教
	村尾　玲美（事務局長）	英語教育学	2009年単位取得退学・人文学研究科准教授
	杉村　泰	日本語教育学、中国語、中国文学	1991年学部卒・2000年博士後期課程満期退学・人文研究科教授
幹事（全学代表）	斎藤　夏来	日本史学	1996博士前期課程修了・人文学研究科教授
	加納　修	西洋史学	1992年学部卒・1994年博士前期課程修了・人文学研究科教授
幹事（研究室代表）	森本　俊之	言語学	1995年学部卒・1997年博士前期課程修了
	寺井　一	日本語学	1999年博士前期課程修了
	南　明世	日本語教育学	2022年国際言語文化研究科博士後期課程修了
	村田　竜樹	応用日本語学	2019年博士前期課程修了
	田中　智之	英語学	1989年学部卒・1991年博士前期課程修了・人文学研究科教授
	森　有礼	英米文学	1991年学部卒・1993年博士前期課程修了
	尾関　修治	英語教育学	1982年学部卒・1984年博士前期課程修了・人文学研究科教授
	鶴田　涼子	ドイツ語・ドイツ文学	2009年博士後期課程単位取得退学
	青木　日向子	ドイツ語圏文化学	博士前期課程在籍中
	永田　道弘	フランス語・フランス文学	2004年博士後期課程修了
	安田　文吉	日本文学	1969年学部卒・1971年博士前期課程修了
	田村　加代子	中国語・中国文学	1987年学部卒・1989年博士前期課程修了・人文学研究科准教授
	松井　貴英	哲学	1996年学部卒
	小見山　直子	西洋古典学	2010年博士後期課程修了
	蟹江　定雄	中国哲学	1961年学部卒
	和田　壽弘	インド哲学	顧問（上記参照）
	間瀬　翼	映像学	2019年博士前期課程修了
	竹内　瑞穂	日本文化学	2009年博士後期課程満期退学
	張　申童	文化動態学	博士後期課程在学中
	中山　佳子	ジェンダー学	2020年博士後期課程満了
	ミギーディラン	メディア文化社会論	人文学研究科准教授
	見崎　美好	日本史学	1978年学部卒
	加納　寛	東洋史学	1993年学部卒・1995年博士前期課程修了
	鈴木　隆将	西洋史学	2009年博士前期課程修了
	木俣　元一	美学美術史学	顧問（上記参照）
	梶原　義実	考古学	人文学研究科教授
	菅野　淑	文化人類学	2008年博士前期課程修了
	黒田　由彦	社会学	1980年学部卒・1982年博士前期課程修了
	高橋　晋也	心理学	1987年学部卒・1989年博士前期課程修了
	齊藤　由香	地理学	1998年学部卒
	鈴木　肇治郎	英語高度専門職業人コース	国際言語文化研究科国際多元文化専攻博士前期課程2017年修了
	岩田クリスティーナ	「アジアの中の日本文化」プログラムJACS	人文学研究科准教授
	ヘイグエドワード	言語学・文化研究プログラムLCS	人文学研究科教授
	杉村　泰	日本言語文化専攻（旧国際言語文化研究科）	1991年学部卒・2000年博士後期課程満期退学・人文学研究科教授
	勝川　裕子	国際多元文化専攻（旧国際言語文化研究科）	2004年博士後期課程満了・人文学研究科准教授

全学同窓会評議員（人文学研究科長の他に）

和田　壽弘	インド哲学	顧問、上記参照
小坂　光一	ドイツ語ドイツ文学	1971年博士前期課程修了・名古屋大学名誉教授

編集後記

編集長　土屋洋（東洋史学分野准教授）

本年度は文学部創設75周年を迎え、本同窓会にとっても区切りの一年となりました。

私もカメラを片手に記念事業に参加し、あらためて同窓生の皆さまや歴代の教職員の方々とのつながりを再確認できました。

この場を借りて、『あおぎり』今号の編集にご協力くださった皆さまに心よりお礼申し上げます。

副編集長　村尾玲美（英語教育学分野准教授）

本同窓会は、今年度より会費を廃止いたしました。これまで『あおぎり』は年会費をお納め下さった会員に郵送しておりましたが、今21号よりすべての同窓生にメールでデジタル版を配信することになりました。より多くの同窓生の方々に『あおぎり』をお楽しみいただけるよう、今後もデジタル刊行を継続いたします。メールアドレスご変更の際は、名古屋大学卒業生等電子名簿へのご登録をお忘れなく！

名古屋大学文学部・人文学研究科同窓会
Newsletter 第21号

発行　2024年１月31日
編集　名古屋大学文学部・人文学研究科同窓会運営委員会
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 email： bun-doso@hum.nagoya-u.ac.jp
同窓会ホームページ　http://nbun-doso.sakura.ne.jp/nbun-doso/Welcome.html